広告

視点を変えれば、世の中は変わる。

Rethink
フォーラム

Rethink=視点を変えて考える

ちょっとした問題や課題に出会ったとき、視点を変えて本質に気づくことで、前向きな行動につながります。
Rethink PROJECTは、JTがパートナーの皆さまとともに行う地域社会への貢献活動の総称です。
私たちは、心みたされるよりよい明日の実現に向けて、Rethinkをキーワードにこれまでにない視点や考え方を活かしながら、
地域社会の様々な課題に向き合っていきます。
そしてRethinkフォーラムは、地域住民、地域企業、自治体の方々とともに地域社会の課題解決に向けてディスカッションをする場です。
みんなで地域の未来についてRethinkしてみませんか?

テーマ

Rethink徳島 ～いまこそ、災害への備えを見直す～

「Rethink徳島～いまこそ、災害への備えを見直す～」（Rethink PROJECT協賛）が11月、開催されました。2024年は能登半島地震や豪雨災害、また初の「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」の発令など、災害と向き合う場面が多くありました。徳島市長の遠藤彰良さん、音楽家の福岡晃子さん、日本たばこ産業（JT）徳島支社長の下岸学さんが徳島の防災の現状、課題について語り合いました。モデレーターはラジオパーソナリティーで、民間の防災士団体代表でもある瀬戸恵深（めぐみ）さん。4人による座談会の様子をお伝えします。

出席者

遠藤彰良さん（徳島市長）
1955年、石井町生まれ。四国放送アナウンサーを経て、2016年に徳島市長に初当選。2024年4月に2回目の当選を果たした。

福岡晃子さん（音楽家）
1983年、徳島市生まれ。ロックバンド・チャットモンチー元メンバーで、音楽家。徳島市東新町でイベントスペース「OLUYO」を運営する。結婚、出産を機に2020年に徳島県南部に移住した。

下岸学さん（JT徳島支社長）
1969年、大阪府堺市生まれ。93年、日本たばこ産業株式会社入社。南九州支社リレーション推進部部長などを経て、2023年4月より現職。

モデレーター

瀬戸恵深さん（エフエムびざん番組ディレクター）
1986年、徳島市生まれ。防災士の資格を持つ母親が集う「徳島ママ防災士の会Switch」を主宰し、子育て世帯を中心とした防災啓発活動に注力する。

テーマ01 能登地震と南海トラフ地震臨時情報

【瀬戸】石川県能登半島を巨大地震や豪雨災害が襲いました。こうした被害を徳島市としてどう受け止めましたか?

【遠藤】まず被害に遭われた方に心からお見舞い申し上げます。徳島市は発災直後から被災地に飲料水を届けたり、水道復旧活動に取り組んだりしました。現地を訪れた職員は、被災地の状況を実際に体験したことで、徳島で同様の災害が発生したときに取るべき行動などを理解できたといいます。近年は気象災害も激甚化しています。私たちの常識をRethinkしていかなければ対応できないのではないでしょうか。

【瀬戸】様々な視点からの対応が必須ですね。JTグループの災害分野での取り組みはどんなものがありますか?

【下岸】災害分野はRethink PROJECTが定める重点領域の一つです。具体的には「備え」として、災害捜索救助隊の育成支援を行っています。「緊急支援」としては国内外の災害発生時に寄付や支援物資の寄贈に取り組んでいます。さらに、「復興支援」として被害が甚大な災害での中長期的な復興支援活動に取り組んできました。

【瀬戸】今年8月には気象庁から「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が初めて発表されましたが、徳島市ではこの呼び掛けにどう対応されたのですか?

【遠藤】ちょうど阿波おどり時期であったため、市内には多くの帰省客、観光客がいました。混乱を来さないよう、演舞場などで避難場所の掲示や呼び掛けを行いました。また市民から市役所への問い合わせも多く、主な内容としてはそれぞれの避難場所の確認でした。

【瀬戸】臨時情報の発表を受け、改めて自らが暮らす場所にどのような災害リスクがあるか考えた人も多いでしょう。福岡さんはどう受け止めましたか?

【福岡】海が目の前にある場所に住んでいるため、ある程度の覚悟は持っていましたが、急に「近日中に地震が来るかもしれない」となって驚きました。これまで、家族がそれぞれ仕事先や保育園など違う場所にいるときに災害が発生した場合の集合場所を詳細に考えていないことに気付きました。また、実際に避難場所への道をたどってみると、経路の両脇に瓦が落ちてきそうな古民家があったり、予想外に道幅が狭かったり…。スマホで見るだけでは分からないことがあると実感しました。

提供=徳島市

テーマ02 多様性に配慮した災害対策

【瀬戸】多様性という視点で、徳島市ではどのような災害への取り組みが進んでいますか?

【遠藤】これまで災害対策に関わってきたのは主に男性でしたが、「女性の視点」が不可欠だと感じています。女性が避難所運営に参加し、より快適な避難所としてほしいです。加えて、高齢者、障がい者、妊産婦らの視点も必要です。実際に子育て中の市職員からの声を受け、子ども用の簡易トイレの備蓄を進めています。また家族の一員であるペットと一緒に過ごせる避難所も設ける予定です。飼い主の方に向けた避難所生活に関するリーフレットを作成しました。

【瀬戸】福岡さんはペット受け入れ可能な避難所について自分事としてとらえられたのではないでしょうか?

【福岡】そうですね。私にもペットがいて、家族の一員だと考えています。ペットを受け入れてもらえる避難所があるとは知らなかったので、これまではペットと車中生活をするしかないと思っていました。受け皿があると、逃げ方も変わってくるでしょう。今暮らしている場所では台風で頻繁に避難指示が出ます。そんな時に近所のお年寄りにも避難を促すのですが、「邪魔になるから」と避難所へ行くのを遠慮する人がいるのです。避難所が誰にとってもより行きやすい場所にならないだろうかとRethinkしていきたいです。

【瀬戸】積極的に避難できる環境・仕組みづくりも、さまざまな視点に立つとその必要性や解決策が見えてくるかもしれませんね。ここまでの多様性の観点から見た避難所づくりの話をどう受け止めましたか?

【下岸】「多様性と支援」について考えるとき、2つの視点でRethinkしていくのがいいのではないかと考えました。一つは「似た立場の人たちの困難を把握し、配慮や対策を考える方法」、つまり大から小へ絞っていくのです。そして逆に「一人の被災者が抱える困難をさまざまな角度から複合的に見る方法」というのも必要ではないでしょうか。

テーマ03 地域に根ざして

【瀬戸】福岡さんは2020年に徳島に移住されましたが、防災に関して都市部と地方の差を感じますか?

【福岡】今住んでいる地域は、すごく防災意識が高いと思います。東京に住んでいた時は一度も避難訓練に参加したことがなかったのですが、今は訓練も頻繁にあります。地元の高齢者の方の中には、毎日津波避難タワーに上っている人もいます。

【瀬戸】災害発生時には地域の方々と助け合わなければならない場面もあるでしょう。私が主宰する防災士団体では、「地域との日頃からのつながり」というのも意識して活動しています。

【福岡】私の子どもは、現代ではマイノリティーとされる自閉症で、大人数のところは苦手です。避難所での行動の仕方などについて前もって教えるのはなかなか難しいのですが、日頃から地域の人と一緒に活動しているので、近所の方々は子どもの特性について理解してくれていると思っています。

【瀬戸】ここで今一度、「Rethink」の観点から災害に強いまちづくりへの決意やメッセージをお願いします。

【遠藤】衛星通信サービスの導入など、皆さんが安心して暮らせる環境整備を加速させます。一方で自治体ができることには限界もあり、一番大切なのは皆さん一人ひとりの意識です。最初の揺れが起こった時やそのあとすぐの行動というのは自分で対処するしかありません。日頃から意識をしていないと、いざというときにパニックにもなります。いろんな角度から考え、防災意識をもってください。

【瀬戸】JT徳島支社の社会貢献活動についてもご紹介ください。

【下岸】徳島支社がずっと大切にしている取り組みの一つが阿波踊り期間中の「ひろえば街が好きになる運動（ひろ街）」です。2004年から実施し、延べ3万人の市民に参加いただきました。ただ、近年は開催日程を短くするなど縮小傾向ではありました。その現状をどうにかしようと、2024年は「地域の方々とのパートナーシップ」とは何なのかをRethinkし、阿波踊り連への参加要請や阿波おどり未来へつなぐ実行委員会との共催に向けた調整に力を注ぎました。結果的に今夏は2千人にご参加いただき、街の人から「ごみの散乱が減った」「良い取り組みですね」といった声をいただきました。今後もより多くの方たちと地域社会のさまざまな課題に向き合い、一人ひとりの心の豊かさを育んでいける活動を推進していきたいと考えています。

【遠藤】徳島市でこのような取り組みをしていただいて感謝しています。

【福岡】私自身、ボランティアでゴミ拾い運動を主宰しようとしたのですが、集めたゴミの処理方法などが開催場所によって違うこともあり、いざやろうとしたら思ったよりもハードルが高いものでした。「何か街のためになることをしたい」という人の思いの受け皿となってくれる企業があるのはありがたいです。

ひろ街通じ、「捨てない意識」を育む

庄野浩司さん
（阿波おどり未来へつなぐ実行委員会実行委員長）

桟敷や街角に捨てられたごみをどうするか。阿波おどりにとって、ごみ問題は長年の課題です。実行委では、ごみの回収スポット「エコステーション」の設置や、ボランティアによるごみ拾い運動のほか、今年は参加者がごみを拾いながら踊る「ごみゼロ連」を結成するという新たな対策を講じました。

ただ、こうした対策だけでは十分とはいえず、今年はJT主導の「ひろ街」を共催させていただくことにしました。ひろ街の参加者は、街の広い範囲に分散してごみ拾いをしてくれます。その姿を見た人たちは、「街中にごみを捨ててはいけない」という意識を自然と強くしてくれたはずです。このような「意識づけ」がひろ街の大きな意義だと考えています。実際、今年の会場に落ちていたごみの量は少なかったと感じています。

来年度以降も実行委として、ひろ街と共催し、活動を周知するといったサポートをしていきたいです。多くの人に「まずはごみを捨てない。そしてごみを拾うことは、かっこいいことなんだ」という意識を持ってほしいです。

Rethinkフォーラムは、JTがパートナー企業の皆さまと行う地域貢献活動「Rethink PROJECT」の一環で実施しています。